

『玄語』復元版の紹介

三浦梅園研究所 北林達也

【1】復元の必要性

これまで刊行され、読まれてきた『玄語』は、以下の4種のみである。

1. 梅園全集版『玄語』（校訂：藤井専随）
2. 岩波日本思想大系版『玄語』（校訂：田口正治）
3. 三枝博音和訳『玄語』（梅園指定の読みに忠実な訓読版）
4. 三浦梅園資料館刊行の総ルビ読み下し版『玄語』（発表者の編集）

これらは三浦黄鶴校訂の版下本をもとにしているという点で共通している。

これ以外に、

4. ぺりかん社 三浦梅園資料集 安永本玄語 浄書本玄語（影印版）
があるが、古い湿式コピーをもとにしているため、版面が非常に読みづらく、ほとんど利用されていない。ただし、これなくしては『玄語』の本格的な研究は出来ない。

岩波版の『玄語』を校訂した田口正治は、翻刻要領の（1）に次のように述べている。

- （1） 版下本を底本としたが、版下本が無く、浄書本のある部分は浄書本、版下本・浄書本ともない場合は安永本によった（但し、形式は版下本に倣った。）従って、
地冊露部、日影・水燥 ―― 浄書本
小冊物部、大物・小物 ―― 安永本
以外は、版下本が底本である。

- （2） 版下本を底本とした部分では、訂正・補入の書き入れは採らず、本文の該当箇所に*を付し、校異にそれを示した。浄書本・安永本を底本とした部分では、梅園自身による訂正・補入の最終結果を本文とした。

この見解には大きな間違いがある。それは、

- a) 版下本の訂正・補入には、梅園の筆が多数含まれている。
- b) 浄書本・安永本の訂正の最終結果の大半は、黄鶴の筆であって梅園の筆でない場合が多い。

この立場は、全集版にも、三枝の読み下し版、また私の編集版にも通じるものなので、これまで刊行されてきた『玄語』は、三浦黄鶴校訂版『玄語』であると言える。それをこれまでの研究者は梅園自筆の『玄語』と勘違いして読んできたのである。三浦黄鶴の加筆訂正が、『玄語』全体に及んでいることに私が気づいたのは、昨年(2007)11月の事である。

黄鶴の校訂は、ほぼ全編に及んでおり、文字の訂正・抹消から、見開きページを丸ごと消したのものもある。自筆稿本に書き込まれた訂正の中には梅園自身のものもあるが、黄鶴の訂正の方がはるかに多い。またいずれとも区別の付かないものも多いが、黄鶴の訂正だけでも全編で1000カ所を越える。黄鶴の訂正は、文字からではなく本文と訂正文字をつなぐ引き線が父梅園と異なることから、ほぼ明確にそれと分かる。

ページごと抹消された部分は、小冊物部の小動物類の分類に関わるところで、内容的に不適であるから抹消されたとは考えられない。むしろ『玄語』の解釈にとって不可欠と思われる文が含まれている。

黄鶴の訂正・抹消は、以下のように分類される。

1. 父梅園の誤記・転記ミス of 訂正（これはあまり多くはない）
2. 接続詞（於是。以是。故。此故。）の抹消。（全体で数百に及ぶ）
3. ページごとの抹消（小冊物部の「小物」に多い。）
4. 黄鶴の考えによって梅園の元々の文を訂正したもの。（かなり多い。）
5. 文字の読み違い。（数カ所である。）

このうち、2と3は、出版を目的とした版下本の作成に於いて生じたものであることからして、出版費用の削減という目的があったものと推測される。黄鶴とその娘婿の矢野弘はともに生涯をかけて『玄語』の校訂に力を尽くした。弘は43歳、黄鶴はその2年後に54歳で世を去っている。三浦家所蔵の版下本からは、地冊露部、日影・水燥、および小冊物部、大物・小物が欠落している。写本939との相違は、返り点・送り仮名の有無のみと言って良いので、おそらく完成後、誰かに貸し出され、返却されていないのであろうと思うが、未完成であるという可能性もある。

黄鶴の校訂の中で、もっとも大きな問題は「所然」を「所以然」と書き換えていること、および、数百にわたる接続詞の抹消である。「所以然」とすることには、矢野弘は大いに反発し、「恐らく作者の意を失す」として注意を促しているが、黄鶴は最後まで「所」と「然」の間に「以」を挟んで「所以然」としている。また、「所牛」（牛なる所）を「所以牛」（以て牛なる所）、「所馬」（馬なる所）を「所以馬」（以て馬なる所）としている。このため返り点との不整合が生じている。この不整合が、黄鶴の加筆であることの有力な証拠となる。「所然」と「以然」の対は、は矢野弘の指摘の通り、条理の対であってこれを壊してはならない。

これまで刊行されてきた『玄語』はすべて黄鶴の訂正を採用している。このため、いまだに梅園自著自筆の『玄語』を読んだ者は居ないというのが実情である。その理由は、

1. 梅園の『玄語』に黄鶴が全面的に筆を入れているとは信じがたかったこと。
2. 黄鶴の筆が入っているにしても、梅園の筆と黄鶴の筆を判別しづらいところが多く、取捨選択が容易ではなかったこと。
3. 訂正抹消の多くが梅園自身のものという漠然とした思い込みがあったこと。

4. そのためか、作業としては比較的容易な抹消・訂正前への「復元」という作業に思い至らなかつたこと。
などであろうと思われる。

【2】復元の手順

従って、梅園自著自筆の『玄語』に極力近い形で『玄語』を読むには、訂正前に復元するしか方法は無い。復元は、以下の手順で行った。

1. 訂正された文字は、訂正前に戻した。

1-1 但し、目視による判読が困難な場合は訂正を採用した。(ごく少数である。)

2 抹消された文は、新たに翻字(入力)した。

2-1 明らかな誤記の訂正や重複の抹消は、その訂正・抹消を採用した(少数である。)

2-2 上記の場合は、その行に注を付けた。

3. 欄外の書き入れは、脱稿後の追記・補記であり、脱稿直後の『玄語』の復元を目的とする今回の作業からは、すべて除外することとした。これらには梅園の書いたものも、黄鶴が書いたものも含まれており、判別の付くもの、付かないものがある。これらはすでに刊行されている『玄語』で読むことが出来る。

4. 『玄語』の文は、白と黒の傍点によって、二行一対になるように書かれている。二行一対でない文は白丸の傍点が付けられている。両者は、相前後して用いられている。(附属資料参照)

4-1 これは梅園、黄鶴、矢野弘ほか少数の門人にとっては、『玄語』の記述法の前提として認められていたことであるが、梅園全集が刊行された明治45年には、忘れ去られていた。

4-2 紙が貴重品であった時代のことであるから、『玄語』そのものもそのような書き方はしていない。従って、版面そのものの復元は行わず、二行一対という記述の形式の復元を行った。つまり、梅園の思考の中の『玄語』の復元に勉めた。(この形式の復元は、すでに三浦梅園資料館から公開されている。)

5. 復元版には、漢文版と総ルビ読み下し版の二種類がある。

5-1 漢文版においては、返り点・送り仮名の再現は行っていない。なぜならこれは海外の漢学研究者が読むことを前提にして、全世界どこからでも読めるようにインターネット上に公開しているものであるから、返り点・送り仮名は海外の読者にとっては無意味な情報となるからである。

5-2 総ルビ読み下し版においては、二行一対形式を視覚的に確認しながら読めるように

するため、特に文末に於いて梅園指定の読みを採用していない場合が多い。

5-3 梅園指定の読みに忠実な棒組・棒読みの『玄語』も作成する予定である。

5-4 この二種類の方法で読むのが『玄語』の正しい読み方である。

6. 図の中の文字も、同様に訂正前に戻した。

【3】復元版の構成

1. 復元版の作成においては、版下本はいっさい参照していない。全八冊の構成は、

第一冊	本宗		浄書本
第二冊	天冊	活部	安永本
第三冊	天冊	立部	安永本
第四冊	地冊	没部	浄書本
第五冊	地冊	露部	浄書本（但し、安永本からの組み入れあり。）
第六冊	小冊	人部	安永本
第七冊	小冊	物部	安永本
例 旨			安永本

『玄語』全八冊の構成は、いまのところこれ以外にあり得ない。もしも、安永本成立直後の写本が見つかれば、それが最適の典拠となるが、まとまった形で存在しているという情報はない。

【4】復元の限界

1. 目視で判読不可能な文字は、現時点では復元できていない。

2. 浄書本には、黄鶴、玄亀が書いた部分があり、これが安永本からの転記であることが確認された場合は、安永本から復元したが、確認できなかった場合はそのまま採用した。

【補足】

振り仮名は専門外の人にも読めるように配慮して付けたものであるが、梅園がそのように読んだという確証はない。梅園が「物」を「ぶつ」と読んでいたのか「もの」と読んでいたのか、個々の語についてまではわからない。それらは、前後の文の脈絡から推測するしかない。

【付録資料】

復元部分の原文版／読み下し版／玄語のファイル構造の見本2種。 以上計4枚。